

### 3. 貴施設と JNIS system 全体のデータ比較(期間中の協力施設のみ)

表5に、貴施設における期間中のすべての手術手技別 SSI 発生率、対応する手術手技の JNIS system 全体での SSI 発生率(再掲)、貴施設の NNIS system データに対する標準化感染比(Standardized Infection Ratio: SIR)が記してあります。SIR は、NNIS system の平均的な病院の何倍の SSI 発生率であるかを意味しています。算出方法は「NNIS マニュアル」pp.64,65 を参照して下さい。

図2には、手術手技別かつ NNIS SSI Risk Index 別の SSI 発生率を、JNIS system 全体と貴施設とを比較する形で表示してあります。グラフ作成は貴施設でサーベイした全ての手術手技に対しては行なっておりません。すなわち、JNIS 全体で3施設以上において合計100例以上観察され、SSI 発生が10例以上みられた手術手技分類のうち、貴施設において少なくとも期間中に50症例以上観察されたもののみを対象としてあります。

付:表5

付:図2(該当する手術手技のみ)

表5 手術部位感染発生率施設データ

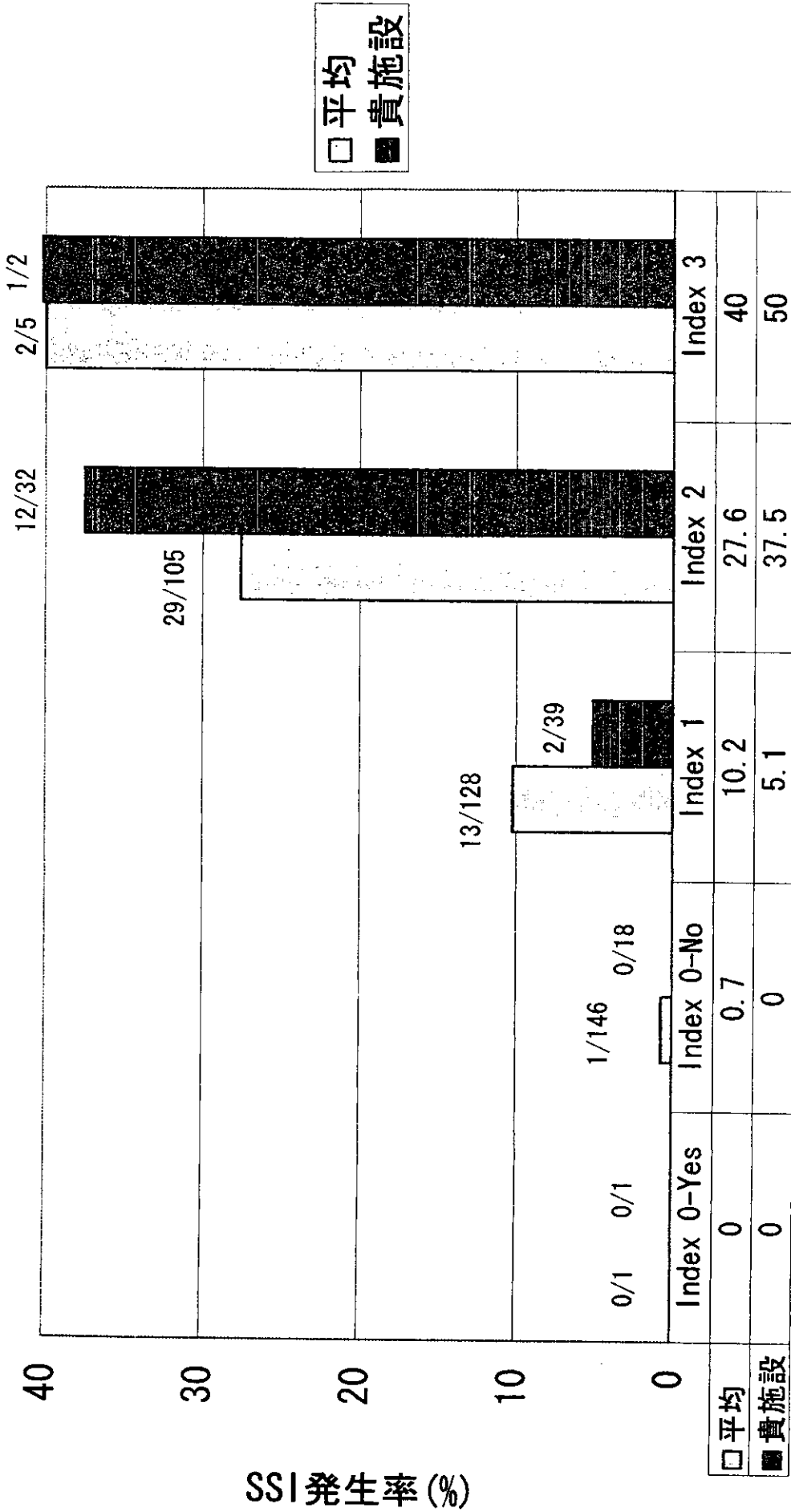
1998.11-2001.12, A 病院

手術手技分類	貴病院データ			JNIS 全体データ
	発生数	症例数	発生率	発生率(再掲)
APPY	15	92	16.3	11.7
BILI	29	121	24.0	15.9
CHOL	7	392	1.8	1.9
COLO	81	310	26.1	16.7
COLN†	23	120	19.2	15.1
REC†	8	40	20.0	19.4
ESOP‡	15	63	23.8	21.6
GAST	56	393	14.3	11.1
HER	2	23	8.7	1.5
HYST	0	1	0.0	0.0
NEPH	0	3	0.0	0.0
OES	0	3	0.0	2.2
OGIT	2	11	18.2	6.7
SB	12	47	25.5	21.8
SPLE	2	36	5.6	6.5
XLAP	21	91	23.1	18.9
TOTAL	187	1091	17.1	6.7
SIR			3.99	

†JNIS独自の手術手技分類: COLN 結腸手術、REC 直腸手術  
(NNIS では COLO に分類されている)

‡JNIS独自の手術手技分類: 食道手術 (NNIS では OGIT に分類されている)

図2-1 NNIS Risk Index 別SSI発生率：A病院、APPY



NNIS Risk Index

図2-2 NNIS Risk Index 別SSI発生率：A病院、CHOL

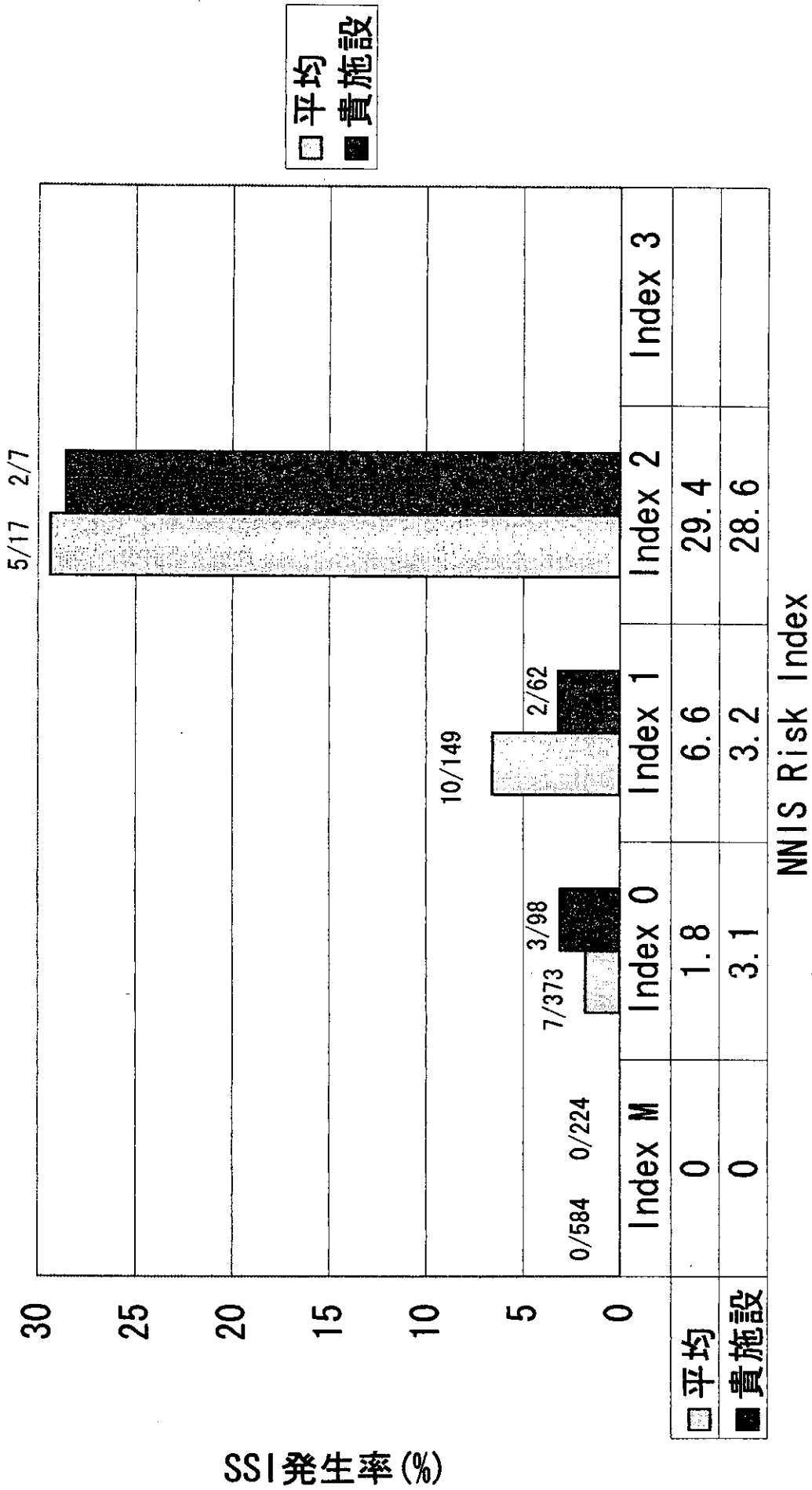
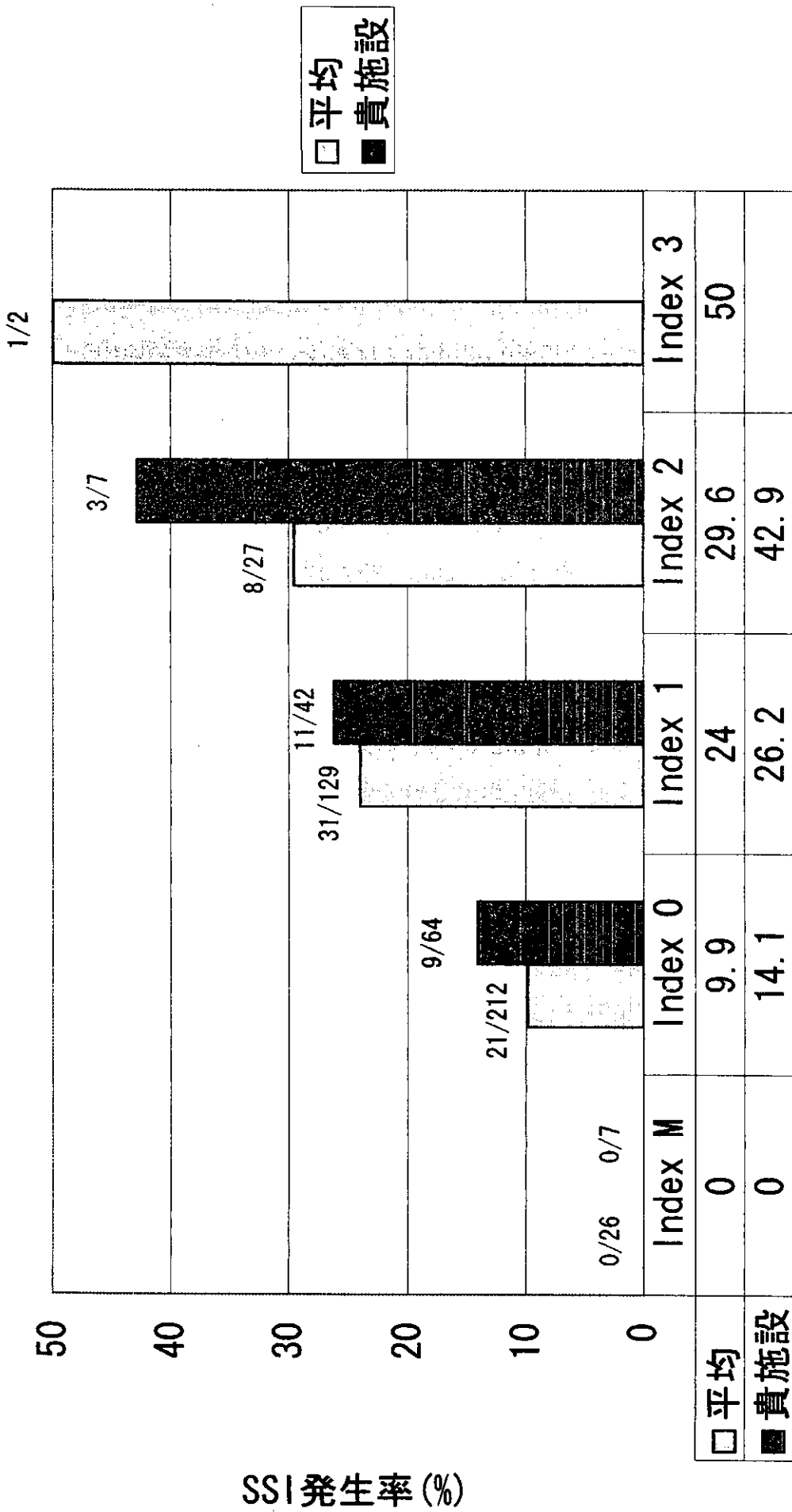


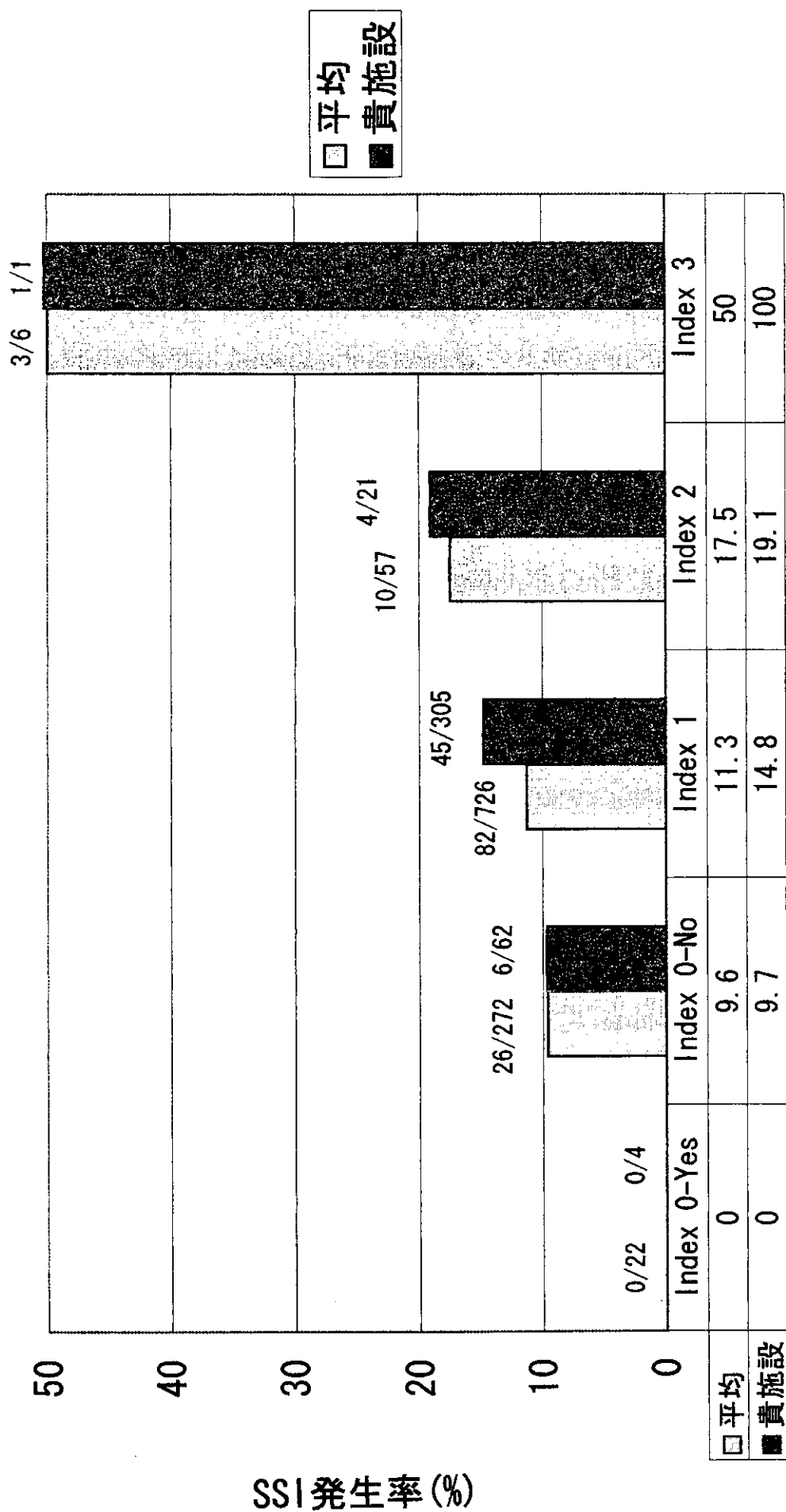
図2-3 NNIS Risk Index 別SSI発生率：A病院、COLN



SSI発生率 (%)

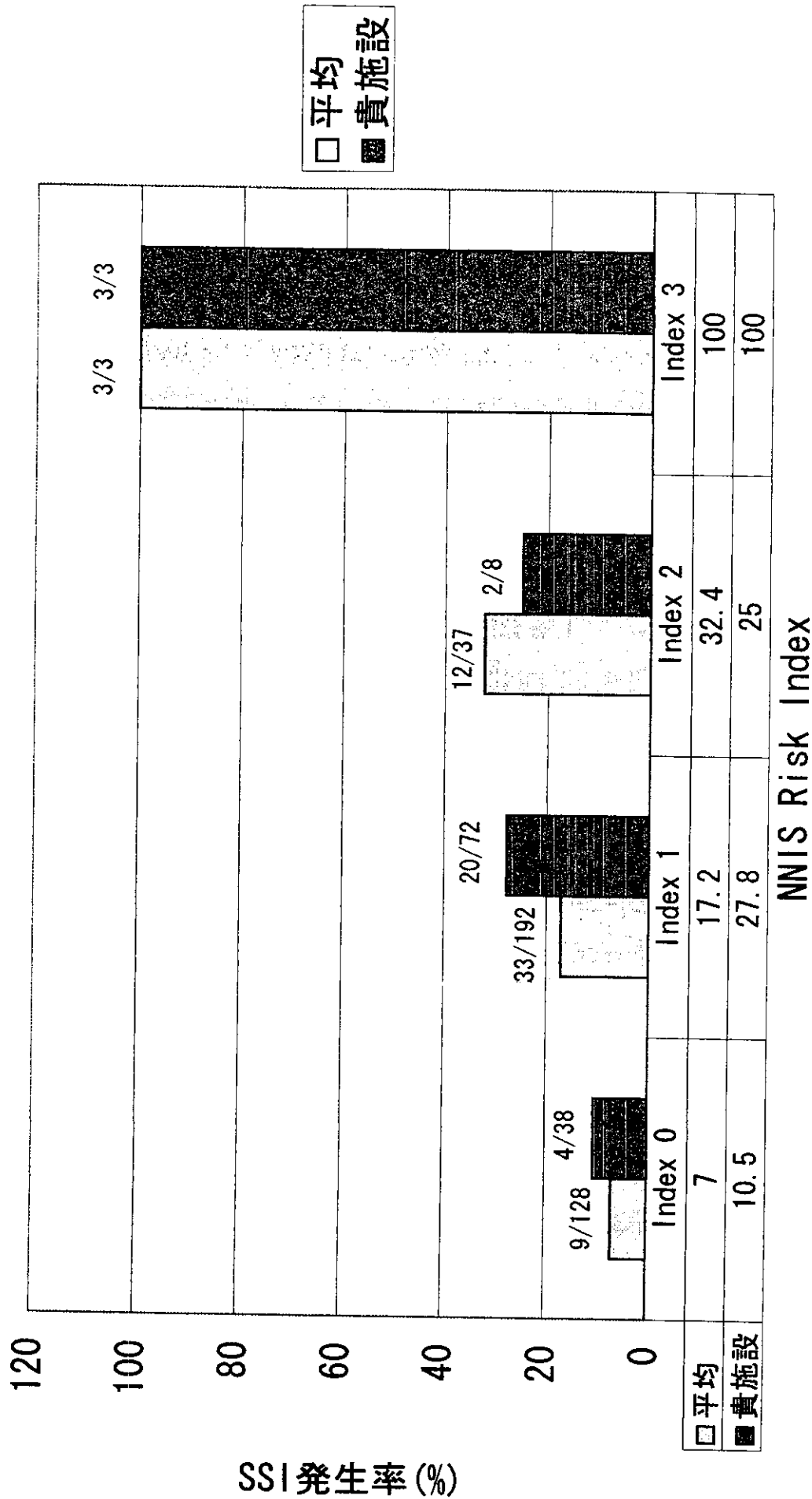
NNIS Risk Index

図2-4 NNIS Risk Index 別SSI発生率：A病院、GAST



SSI発生率(%)

図2-5 NNIS Risk Index 別SSI発生率：A病院、BILI



## 資料1

### データコンバータ説明

#### 内容

- [概要](#)
- [インストールとアンインストール](#)
- [ファイルについて](#)
  - [入力ファイル](#)
  - [出力ファイル](#)
  - [フォーマットファイル](#)
- [データ閲覧](#)
- [データ検索](#)
- [ファイル出力](#)
- [仮想レコード処理](#)
- [作業例](#)
  - [データの選択\(血液、髄液からの検体を選ぶ\)](#)
  - [使わないデータを除いて、短いレコードを作る](#)
  - [一菌株、一薬剤毎に、感受性検査の結果を含むレコードを作る](#)
  - [新しい予備領域をもうける](#)
  - [MICを薬剤毎にまとめる](#)
- [endnote](#)
- [連絡先](#)
- [付録\(Data viewer, Data merger\)](#)

---

file:///C:/Data/IV耐性菌サーベイランス/解析法の検討(研究班含む)/平成13年度報告書/資料1データコンバータ説明書/manual%2... 02/03/27  
データコンバータの説明 2/35 ページ


## 概要 [先頭に戻る](#)

このデータコンバータは、固定長のレコードからなるファイルを、別のフォーマットの固定長のレコードからなるファイルに変換するためのツールです。大型の固定長レコードを、Excelや、Access、そのほかの集計用のソフトで扱える縮小した見出し付きのCSVファイルに変換できます。不要な項目を除くこと、レコードを延長すること、項目の順序を入れ替えること、項目の内容によってレコードを選択すること、複数のファイルを一つにまとめることが出来ます。1レコードを複数レコードとして扱う仮想レコード処理によって、一度の処理で、単一レコード中の複数項目を、複数レコードの単一項目に変換すること、複数項目に含まれる特定のデータを単一項目に集めることが出来ます。



file:///C:/Data/耐性菌サーベイランス解析法の検討(研究班含む)/平成13年度報告書/資料1データコンバータ説明書/manual%2... 02/03/27  
 データコンバータの説明 4/35 ページ

## インストールとアンインストール [先頭に戻る](#)

適当なフォルダーにdata\_converter1xxx.exe (xxxはバージョン番号)を納めてください。特にインストールは必要ありません。のアイコンをクリックすれば、起動します。必要に応じて、ショートカットを作ってください。レジストリーに書き込みはいたしません。アンインストールは、実行ファイル、ショートカットを削除して行ってください。

## ファイルについて [先頭に戻る](#)

### 入力ファイル [先頭に戻る](#)

- 厚生労働省サーベイランスファイル(検査部、ICU)など、固定長のファイルを指定します。出力ファイルとは別のファイルを指定してください。

### 出力ファイル [先頭に戻る](#)

- 入力ファイルを加工して出来たデータを保存するためのファイルを指定します。既存のファイルを指定した場合、ファイルを開いた時点で元のデータは失われます。注意してください。

### フォーマットファイル [先頭に戻る](#)

- 入力ファイルの、どこに、何が入っているか、また、出力ファイルにどのデータを出力するかを示すファイルです。Excelなどで作り、CSVファイルとして書き出すことで作成できます。A列には、項目名を入れます。長さは半角64文字(全角32文字)までです。B列には、項目が始まる位置(1~)を入れます。C列には、その項目の長さ(1~)を入れます。データはCSVで出力してください。blockcopy命令は、フォーマットファイルの後半に書きます。

調査対象	1	1			
施設コード	2	5			
ID	7	15			
入院日	22	8			
性別	30	1			
生年月日(西暦)	31	8			
入院外来	39	1			
診療料	40	3			
病棟	43	15			
検査の目的	58	1			
感染症名	59	9			
感染症 ICD-10	68	5			
体温	73	4			
白血球数	77	6			
CRP(定量)	83	5			
CRP(定性)	88	1			
抗菌薬投与の有無	89	1			
(1)抗菌薬名	90	4			

フォーマットファイルの例を示します。

```

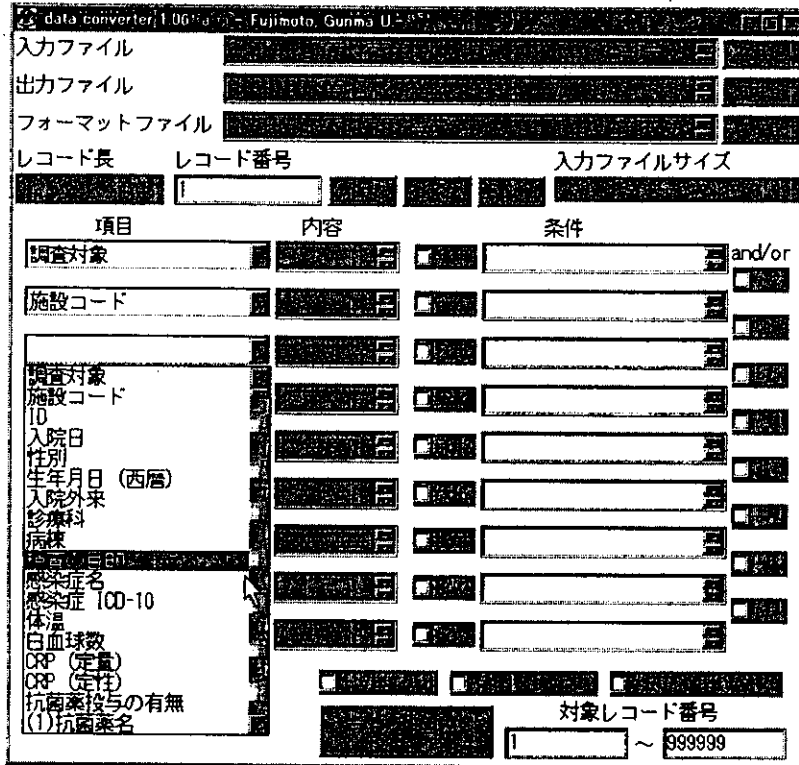
調査対象,1,1
施設コード,2,5
ID,7,15
入院日,22,8
性別,30,1
生年月日(西暦),31,8
入院外来,39,1
診療料,40,3
病棟,43,15
検査の目的,58,1
    
```

フォーマットファイルによって、入力データと項目が結びつけられます。出力ファイルには、フォーマットファイルにあるデータが、その順番で出力されます。従って、フォーマットファイルから、出力ファイルに出す必要のない項目を抜くか、その項目の先頭にセミicolon(;)を付けておけば、出力ファイルには必要な項目だけが出力されます。また、項目の順序を変えたり、必要があれば、同じ項目を複数回出力することも可能です。フォーマットファイルは1行180字まで。空白の行、一行のセミicolon(;)以降は無視されます(1行180字の制限はセミicolon以降も含む)。フォーマットファイルに書ける項目数は1000項目まで(blockcopy命令: 仮想レコード処理参照: は除く)です。

先頭に戻る、データコンバータ画面見本

## データ閲覧 先頭に戻る

- 項目のプルダウンメニュー(下図)から表示したい項目を選びます。(項目名を選ぶとき、機種によっては、プルダウンメニュー内で、矢印、Up、Down、End キーや、マウスのホイールなどが使えます。)
- レコード番号を入力します。[show]ボタンを押すと、データが表示されます。固定長が保たれていない場合を考え、先頭から、区切り記号(CR、LF、null code)を基準にして、レコード番号を振っています。数千番を超えるレコードの場合、読み込まれるまで、時間がかかります。[up]を押すとレコード番号が一つ進みます。(この場合は、時間がかかりません。)[down]を押すと、レコード番号が一つ戻ります。後ろの方のレコード(数千番を超える)では、時間がかかります。レコード長(そのレコードのもの)も、表示されます。
- 項目の選択は、いつでも変更できます。すべて解除する必要があるときは、フォーマットファイルを読み込みなおしてください。
- (レコードの閲覧のみを目的としたデータビューアを用いると、大きなファイルの後ろの方のデータも時間をかけずに見ることが出来ます。)



先頭に戻る、データコンバータ画面見本

## データ検索 先頭に戻る

- 項目のプルダウンメニュー(下図)から条件に用いたい項目を選びます。(項目名を選ぶとき、機種によっては、プルダウンメニュー内で、矢印、Up、Down、End キーや、マウスのウィールなどが使えます。)条件に用いない項目を閲覧用に選んでかまいません。
- 条件の欄に、項目に対する条件を入力します。条件の欄が空欄のままの場合、論理は常に真になります。(notがチェックされていれば、常に偽)。
- データが未入力レコードを探するには、項目の長さに対応する空白(スペース)を入力します。内容を見たいだけの項目は、条件を空欄にしておきます。スペースは、直接見ることが出来ないので注意してください。(矢印キーを使ってカーソルが動く範囲が、スペースが入力されている範囲です。項目の長さは、その項目を表示したときに、内容のボックスの中でカーソルを動かしてみると分かります。カーソルの動く範囲がその項目の長さです。)
- notにチェックを入れると、不一致の場合に真になります。
- and/or boxにチェックを入れると、その前(上)の論理とその行の論理がorで結ばれます。チェックがない場合は、andです。論理演算は、優先順位に関係なく、上から下に行われます。(したがって、条件が空欄の行を挟んで、二つの行でorを取るときは、下側の行の右肩にチェックを入れます。条件が空欄の場合、notにチェックがなければ値は真ですから、前の項目とorで結合されると、値が、常に真になってしまいます。)
- レコード番号を入力して[次]をおすと、次に一致するレコードが表示されます。
- 検索動作中に動作を止めるには、show, up, downなどの画面上のボタンを押してください。[最初から]を押すと、ファイルの最初から検索をします。作業を継続可能である場合、



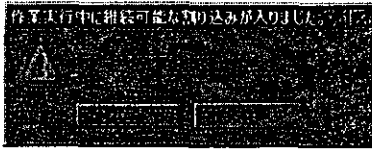
と表示されます。いいえを押すと、動作が停止します。

- 項目の選択は、いつでも変更できます。項目を、すべて解除する必要があるときは、フォーマットファイルを読み込みなおしてください。

先頭に戻る、データコンバータ画面見本

## ファイル出力 先頭に戻る

- 条件にあったファイルを、フォーマットファイルの順番で書き出します。条件判断はデータ検索と同じルールに従います。フォーマットファイルが、入力ファイルのフォーマットを完全に記述している場合、出力ファイルは、入力ファイルと同じ形式になります。対象レコードを入力します。最後のレコード番号が分からない場合、999999など、大きめの数字を入れておきます。[ファイル出力]を押すと、出力ファイルに書き出しが始まります。レコード番号の欄には、作業中のレコードの番号が表示されます。そのほかのレコード固有のデータは、作業中更新されません。
- 検索動作中に動作を止めるには、show, up, downなどの画面上のボタンを押してください。作業を継続可能である場合、



と表示されます。いいえを押すと、動作が停止します。

- 出力ファイルを変更せずに、複数回作業をした場合、後に行った作業のデータは、前に行った作業の後ろに結合され一つのファイルになります。これは、入力ファイルを変更しても、出力ファイルの再指定を行わない限り、同じです。(これを利用して、複数のファイルを一つにまとめることが出来ます。多数のファイルの結合のみを行うのであれば、ファイル結合用のユーティリティの方が高速です。)
- 区切り、チェックボックスがチェックされていると、各項目の間に、カンマが入ります。  
見出し行出力チェックボックスがチェックされていると、ファイル出力作業の最初に見出し行が出力されます。  
この二つを利用すると、Excelやロータス123、Access、ロータスアプローチなどで読み込み可能な見出し行付きのCSVファイルが作れます。このファイルを適当な方法で読み込むと、項目名も、受け渡されます。見出し行チェックボックスは、チェックされていると複数回の作業を同じ出力ファイルに対して行った場合、作業毎に見出し行が書き出されます。これを避けるは、2回目の作業以降、チェックをはずします。
- 見出し行には、フォーマットファイルの項目名が入ります。区切りチェックボックスがチェックされている場合、項目名の全体が出力されます。区切りチェックボックスがチェックされていない場合、項目の長さと同じだけのデータが出力されます。漢字など2バイト系の文字も、項目長の

file:///C:/Data\_IV耐性菌サーベイランス解析法の検討(研究会含む)平成13年度報告書資料1データコンバータ説明書manual%2... 02/03/27  
データコンバータの説明 10/35 ページ

分だけ出力されますので、これらを含む項目名は、表示が化けることがあります。(その結果、ASCIIとして表示出来ないコードを含む場合、表示上のレコード長が、実際と異なることがあります。)

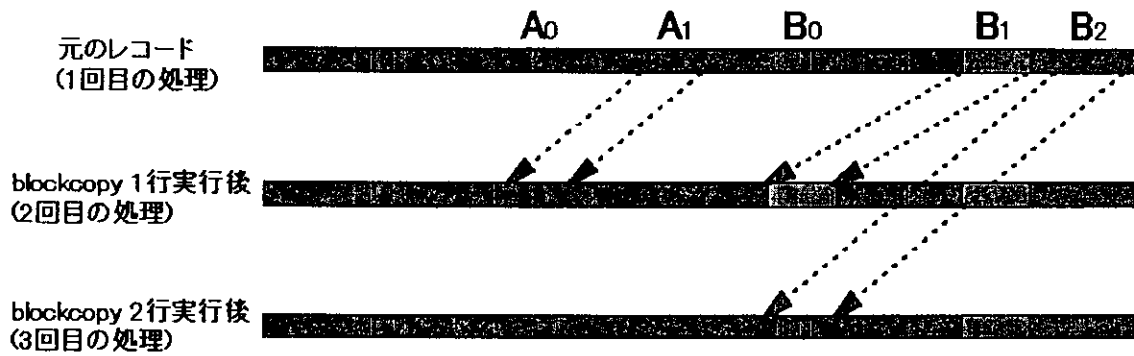
- 付加情報出力チェックボックスがチェックされていると、レコードの最後に、レコード番号(record #)(8バイト)、blockcopy命令行(b.c. #)(6バイト)、元のデータのレコード長(改行記号を含む; rec len.)(8バイト)が、付加されます。レコード番号は、入力ファイルの最初のレコードを1として、昇順で振られています。blockcopy命令行は、そのレコードが、どの仮想レコードに由来するものかを示すものです。blockcopy命令行0は、元のレコードを指します。レコード長は入力ファイル上のレコードの長さです。
- 入力データに長さの不正(フォーマットファイルに従って読みとろうとするとレコードの外にでてしまう)があった場合、出力レコードには、フォーマットファイルの記述に合うように長さを整えたデータが出力されます。長さの足りない分は、アスタリスク(\*)が埋め込まれます。
- レコードの区切りは、Windows型のCR+LFです。(入力支援ソフトは、Unix型のLFのみですので、これを読み込んで、データコンバーターで出力すると、レコード長がCRの分1バイト長くなります。検査部の場合、3051バイトが3052バイトになります。データの部分の長さは同じです。1バイト伸びるのは最初だけです。)入力ファイルについては、LFのみ、CRのみ(Mac型)、CR+LFの何れも、区切りとして認識します。

先頭に戻る、データコンバータ画面見本

## 仮想レコード処理 先頭に戻る

- レコード内のデータ移動によって出来た仮想のレコードを、元のレコードと同様に処理をすることが出来ます。データの移動を指定するために、フォーマットファイルの最後に、blockcopy命令を書きます。最初に、元のレコードが処理されます。blockcopy命令が一行ずつ実行されます。一行の実行が終わる毎に、出来たレコードを仮想レコードとして処理します。

file:///C:/Data\_IV耐性菌サーベイランス解析法の検討(研究会含む)平成13年度報告書資料1データコンバータ説明書manual%2... 02/03/27



blockcopy命令は、blockcopyと書いた一行で始めます。下の書式で書きます。

```
blockcopy
A1開始位置, A1の長さ, A0開始位置, B1開始位置, B1の長さ, B0開始位置
```

一回目の処理は、元のレコードを処理します。条件の判断、書き出す元になるデータは、元のデータが用いられます。フォーマットファイルにblockcopyで始まる、blockcopy命令があると、これしたがって、レコード内でデータのコピーが行われます。一行に、コピーの元になる位置(レコードの1バイト目が、1)、カンマ(,)、コピーするデータの長さ(バイト数)、カンマ(,)、コピーする位置、で一組を作る命令を、カンマ(,)で区切って、5組まで記述出来ます。命令一行毎に仮想的レコードに対して、元のレコードと同様の処理が行われます。条件の判断、書き出す元になるデータには、仮想的レコードが用いられます。一行は、180文字まで。命令は、1000行まで。空白行、一行のセミコロン(;)以降は無視されます。(180字の制限は、セミicolon以降も含めて)

A185		blockcopy			
退院時最終診断名	2944	9			
最終診断名ICD-10	2953	5			
共通利用予備領域	2958	39			
バージョン情報	2997	4			
モニター施設利用領域	3001	50			
blockcopy	blockcopy 命令領域				
	551	16	535	A-2 薬剤名から判定(*)%A-1にコピー	
	567	16	535	A-3 薬剤名 "	
	583	16	535	A-4 薬剤名 "	
	599	16	535		
	615	16	535		
	631	16	535		
	647	16	535		
	663	16	535		
	679	16	535		
	695	16	535		
	711	16	535		
	727	16	535		

• 例(1)

```
共通利用予備領域,2958,39,
バージョン情報,2997,4,
モニター施設利用領域,3001,50,
```

```

blockcopy,blockcopy 命令領域,
551,16,535;A-2 薬剤名から判定(+)をA-1にコピー
567,16,535;A-3 薬剤名 "
583,16,535;A-4 薬剤名 "
599,16,535,
315,16,535,
531,16,535,
547,16,535,

```

blockcopy命令は、フォーマットファイル後ろの部分に例のように記述します。Excelなどを利用して書き、CSV形式で出力するか、note padなどで、直接書きます。(1)の例では、一行は、一組の命令のみをふくみますが、(2)の例では一行目に2組の命令が含まれています。507から始まる7バイトを500の位置にコピーし、1015から始まる16バイトを535の位置にコピーしてできあがった仮想レコードに対して処理を行います。(これらの記述の中でセミコロン(;)に続くコメント、たとえば、「blockcopy命令領域」などは、備忘のためのもので、必須ではありません。)

● 例(2)

```

507,7,500,1015,16,535;①B菌コードから起因性をA菌コードから起因性にコピー ②B-1からB-30までをA-1からA-30までにコピー
1031,16,535;A-2 薬剤名から判定(+)をA-1にコピー...
1047,16,535;A-3 薬剤名 同じく...
1063,16,535;A-4 薬剤名 同じく...

```

それぞれの命令のコピーの元となるのは、常に最初に処理をした、大元(おおもと)のレコードです。コピー先は、最初は、大元のレコードですが、2行目からは、その前の行(までの作業)で出来た仮想レコードです。(上の図の3回目の処理でもA1が、元のA0の位置にあることに注意してください。)

コピーの元や、先は、単一レコード内で有れば、フォーマットファイルのフォーマットの情報からはずれていてもかまいません。(つまり、出力しない項目を操作してもかまわない。)

仮想レコードを用いて検索を行った場合、条件にあった仮想レコードが現れるまで、blockcopy命令の処理が行われますが、いったん、条件にあった仮想レコードが見つかったら、そのレコードについてのblockcopy命令の実行は終了します。

[先頭に戻る](#)、[データコンバータ画面見本](#)、[仮想レコード処理の始めに戻る](#)

file:///C:/Data\_IV/耐性菌サーベイランス/解析法の検討(研究班含む)/平成13年度報告書/資料1データコンバータ説明書/manual%2... 02/03/27  
データコンバータの説明 14/35 ページ

## 作業例 [先頭に戻る](#)

### I. 血液、髄液からの検体を選ぶ [先頭に戻る](#)

- 検査材料が、血液、髄液のデータのみを集めたファイルを作ります。データの形式は、厚生労働省のフォーマットのままにします。従って、フォーマットファイルは、すべての項目のデータを含むもの、(例;検査部フォーマットファイル(藤本作成).csv)を用います。厚生労働省フォーマット(固定長)のデータファイルを入力ファイルとします。出力ファイルは、適当な名前(例:血液髄液001.txt)をつけます。

検査部フォーマットファイル(藤本作成).csvの内容

```

調査対象,1,1
施設コード,2,5
ID,7,15
入院日,22,8
性別,30,1
生年月日(西暦),31,8
入院外来,39,1
診療科,40,3
病棟,43,15
検査の目的,58,1
感染症名,59,9
感染症 ICD-10,68,5
体温,73,4

```

file:///C:/Data\_IV/耐性菌サーベイランス/解析法の検討(研究班含む)/平成13年度報告書/資料1データコンバータ説明書/manual%2... 02/03/27

- 項目に、検査材料名を3つ選び、それぞれ、401(静脈血)、402(動脈血)、403(髄液)を入れ、それらをorで結びます。

(項目名を選ぶとき、機種によっては、プルダウンメニュー内で、矢印、Up、Down、End キーや、マウスのホイールなどが使えます。)

- ために、検索をかけてみます。条件にあったレコードが選ばれることを確認します。
- 条件を空欄(未入力)にし(かつnotを選択しない)かぎり、表示用にどの項目を選んでも、結果に関係ありません。
- 正しいデータが選ばれていることが確認出来たら、対象レコード番号を入力し、(最後の番号が分からないときは、十分に大きい数字を入れる。)ファイル出力ボタンを押します。
- レコード番号の欄の数字が変化している間は、作業中です。画面中のボタンを押すと、



継続をするか否かのメッセージボックスがでます。はいを押すと作業が続行します。いいえを押すと作業が終了します。

先頭に戻る、作業例の始めに戻る

## II. 使わないデータを除いた短いレコードを作る。 [先頭に戻る](#)

- Excelなどで用いるために、項目数の少ないレコードを作ります。
- フォーマットファイルから、出したい項目以外のフォーマットを除くか、項目名の前に、セミコロン(;)をつけて無視されるようにします。
- フォーマットファイルの例を示します。この例では、検体の簡単な属性と、分離菌の種類だけのレコードを作ります。

```

;検査部フォーマットファイル
;縮小出力、例1

調査対象,1,1
施設コード,2,5
ID,7,15
入院日,22,8
性別,30,1
生年月日(西暦),31,8
    
```

- 入力ファイルとして、必要なデータの入っている、厚生労働省フォーマット(固定長)のファイルを指定します。
- 出力ファイルに、適当な名前をつけます。
- 条件を付けずに、出力を行います。

file://C:\Data\_IV耐性菌サーベイランス\解析法の検討(研究班含む)\平成13年度報告書\資料1データコンバータ説明書\manual%2... 02/03/27  
 データコンバータの説明 18/35 ページ

- Excelなどで読むことを考えてカンマ(,)区切り、見出し行を付けて出力します。

file://C:\Data\_IV耐性菌サーベイランス\解析法の検討(研究班含む)\平成13年度報告書\資料1データコンバータ説明書\manual%2... 02/03/27



調査対象	施設コード	ID	入院日	性別	生年月日(入院外来)	診療科	病棟	検査の感染症	感染症 ICD	検査材料	検体提出
1	8007	1453750	20001113	F	19440601	2	1004A			401	20001114
1	8007	682098	20000807	M	19240511	2	1005B			401	20001114
1	8007	0682098Y1	20000807	M	19240511	2	1005B			401	20001114
1	8007	536636	20001115	M	19310415	2	5073A			402	20001115
1	8007	106917	20001116	F	19701015	2	1005B			401	20001116
1	8007	1291742	20001116	M	19360303	2	1005A	bl004		401	20001116
1	8007	1151940	20000224	F	19180119	2	1005A	bl004		401	20001120
1	8007	1481762	20000927	F	19250928	2	5013B			401	20001121

- 出力されたデータを、Excelで読むと(拡張子をcsvにしておくと、特別な操作無しで、開けます。)図のように、見出し行付きで(見出し行の指定(固定)は、行の固定を手動でしてください。)開けます。

先頭に戻る、作業例の始めに戻る、使わないデータを除いた短いデータを作るの始めに戻る

### III. 一菌種、一薬剤ごとに、感受性検査の結果を含むレコードを作る。先頭に戻る

- 菌名と、薬剤コードで選択をかけて、これを繰り返し行うことでも、この作業を行うことが出来ます。仮想レコードを用いると、この作業が一度に出来ます。
- フォーマットファイルに、blockcopy命令を書く必要があります。
- フォーマットファイルの例を示します。

```

;検査部フォーマットファイル エクセル等読込ファイル作成用,,
;感受性検査を菌毎薬毎に展開するblockcopy命令付き,,
...
調査対象,1,1
施設コード,2,5
ID,7,15
入院日,22,8
性別,30,1
生年月日(西暦),31,8
入院外来,39,1
診療科,40,3
病棟,43,15
検査の目的,58,1
感染症名,59,9
感染症 ICD-I0,68,5
    
```

(この例では、データを他の目的で用いることも考えて、多くの項目を残してあります。)

このフォーマットファイルのblockcopy命令には、薬剤A-1のデータの位置にA-2からA-30のデータを順にコピーし、さらに、菌Bの菌コードから起因性までデータを菌Aの相当する部分にコピー後、薬剤B-1からB-30までのデータを薬剤A-1のデータの位置にコピーし順次仮想レコードとして処理、さらに、菌CDEについても同様の動作を行うようにデータ位置の番かれています。

(この例の、所々に、無駄なカンマ(,)が入っています。これらは、Excelのセルが空でない場合に出力されます。命令としては無視しますので、気にする必要はありません。)

- 入力ファイルとして、必要なデータの入っている、厚生労働省フォーマット(固定長)のファイルを指定します。

file://C:\Data\_IV耐性菌サーベイランス\解析法の検討(研究班含む)\平成13年度報告書\資料1データコンバータ説明書\manual%2... 02/03/27  
 データコンバータの説明 22/35 ページ

- 出力ファイルに、適当な名前をつけます。
- 項目から、A菌コード、A-1薬剤名を選びます。
- それぞれ空白(半角スペース)×4個を条件に入力します。
- 条件ボックスの前のnotチェックボックスをチェックします。

これで、菌コード、薬剤名何れも空白でないものが選ばれます。

- Excelなどで読み込むときの便宜のため、カンマ(,)区切りのチェックボックスをチェックします。
- 同じく、見出しを付けるために、見出し行出力のチェックボックスをチェックします。  
(見出し行は、カンマ区切りの時には項目名をそのまま出力、カンマ区切りでないときには、項目長に合わせて出力されます。)
- 仮想データの扱いを含み、一つのレコードから複数のレコードが生成されるので、付加情報チェックボックスをチェックし、後で、そのレコードがどこから来たのか分かるようにしておきます。

注) 検索を行う場合の留意点。仮想レコードを用いて検索を行った場合、条件にあった仮想レコードが現れるまで、blockcopy命令の処理が行われますが、いったん、条件にあった仮想レコードが見つかったと、そのレコードについてのblockcopy命令の実行は終了します。

菌尿の有無培養結果	A菌コード	A菌種	A菌数	A-1 薬剤名	A-1 検査方法	A-1 仕切法	A-1 MIC	A-1 阻止	A-1
	2001			1816	18	3	16	0	
	2001			2726	18	3	19	0	
	2001			2401	18	3	16	0	
	2001			2501	18	3	4	0	
	2001			1841	18	3	4	0	
	2001			1631	18		32	0	
	2001			2201	18	3	8	0	
	2001			1101	18	3	8	0	
	2001			1401	18	3	16	0	
	2001			1701	18	3	8	0	
	2001			1601	18	3	16	0	

file://C:\Data\_IV耐性菌サーベイランス\解析法の検討(研究班含む)\平成13年度報告書\資料1データコンバータ説明書\manual%2... 02/03/27

できあがったファイルを、エクセルで開くと(拡張子をcsvにしておく、特別な操作無しで、開けます。)図のように、見出し行付きで(見出し行の指定(固定)は、行の固定を手動でしてください。)データが得られます。

これらは、一つのレコードを繰り返し調べて、複数の菌、複数の薬剤については、別のレコードとして出力したものです。

これらのレコードには、元のデータにあった様々な情報がフォーマットファイルに基づいて受け継がれます。

モニター誌	record #	b.c. #	rec len.
	744	20	3052
	744	21	3052
	744	22	3052
	745	0	3052
	745	1	3052
	745	2	3052
	745	3	3052
	745	4	3052
	745	5	3052
	745	6	3052
	745	7	3052

付加情報出力部分のデータは、レコード番号(record #)、blockcopy命令行(b.c. #)、元のデータのレコード長(改行記号を含む; rec len.)からなっています。blockcopy命令行は、そのレコードが、どの仮想レコード由来するものかを示すものです。blockcopy命令行0は、元のレコードを指します。レコード番号は、入力ファイルの最初のレコードを1として、昇順で振られています。

A菌コード	A-1 薬剤名	A-1 検査方	A-1 仕切法	A-1 MIC	A-1 阻止円	A-1 判定	record #	b.c. #	rec len.
1324	2121	9	1	1	9	S	1581	12	3052
1324	1208	9	1	1	9	S	1581	13	3052
1324	1201	9	1	0.03	9	S	1581	14	3052
1324	1266	9	1	16	9	S	1581	15	3052
1324	2726	9	1	2	9	S	1581	16	3052
1324	2301	9	1	2	9	S	1581	17	3052
1205	1871	9	2	8	9	R	1581	30	3052
1205	1216	9	2	2	9	S	1581	31	3052
1205	1537	9	2	16	9	R	1581	32	3052
1205	2006	9	2	2	9	R	1581	33	3052
1205	1601	9	2	32	9	R	1581	34	3052
1205	9999	9	2	16	9	R	1581	35	3052
1205	1901	9	2	4	9	R	1581	36	3052
1205	1701	9	2	16	9	R	1581	37	3052
1205	2601	9	2	16	9	R	1581	38	3052
1205	1821	9	2	8	9	R	1581	39	3052
1205	1401	9	2	4	9	S	1581	40	3052
1205	2516	9	2	4	9	J	1581	41	3052
1205	2121	9	1	1	9	S	1581	42	3052
1205	1208	9	2	4	9	R	1581	43	3052
1205	1201	9	2	8	9	S	1581	44	3052
1205	1266	9	1	16	9	S	1581	45	3052
1205	2726	9	1	2	9	R	1581	46	3052
1205	2301	9	1	2	9	S	1581	47	3052
2001	1816	9	1	8	9	S	1581	60	3052
2001	1216	9	1	2	9	S	1581	61	3052
2001	1101	9	1	8	9	S	1581	62	3052
2001	1691	9	1	16	9	S	1581	63	3052
2001	1661	9	1	2	9	S	1581	64	3052

単独のレコードから、複数の菌、複数の薬剤のレコードが生成されている、例を示します。ここにあるだけで、菌コード1324、1205、2001の3つの菌が検出されていることが分かります。それぞれの菌について複数の感受性検査の結果が、A-1の結果として出力されています。record#とb.c.#をみることによって、これらが一つのレコードから出来た仮想レコードに由来することが分かります。

注) この例では、項目名に、A-1に由来する名前を残していますが、これらをすべて欄Aに変えてフォーマットファイルを作り、それを出力することも、可能です。

先頭に戻る、作業例の始めに戻る、一菌種、一薬剤ごとに、感受性検査の結果を含むレコードを作るの始めに戻る

#### IV. 新しい予備領域をもうける 先頭に戻る

- レコードの長さを延ばすことが出来ます。固定長(カンマ、"なし")で出力したファイルは、適当な、フォーマットファイルを書くことによってさらに、加工することが出来ます。出力ファイルには、フォーマットファイルに書かれた項目が、書かれた順に書き出されます。データの始まる位置を示すフォーマットファイルの2番目の数字(例:生年月日(西暦),31,8の31)は、入力ファイル中の位置を示すもので、出力ファイル中の位置は、あくまで、フォーマットファイルに書かれた順です。そこで、たとえば、フォーマットファイルに、

```
バージョン情報,2997,4
モニター施設利用領域,3001,50
モニター施設利用領域,3001,50
```

と記述すると、モニター施設利用領域,3001,50は、二つ続けて出力されることになります。これを利用すると、この場合、50バイトの予備領域が確保されます。このファイルを入力ファイルとし、新たな領域を利用するには、

```
モニター施設利用領域,3001,100
あるいは、
モニター施設利用領域(1),3001,50
モニター施設利用領域(2),3051,50
```

と記述したフォーマットファイルを用います。。また、この領域の後ろに、他の項目が有れば、順次開始位置をずらす必要があります。(この操作は、Excelなどの表計算ソフトで簡単に行うことができます。)

別の方法として、

```
旧領域,1,3050
```

file:///C:/Data\_IV/耐性菌サーベイランス/解析法の検討(研究班含む)/平成13年度報告書/資料1データコンバーター説明書/manual%2... 02/03/27  
データコンバータの説明 26/35 ページ

```
新領域,3051,100
```

と書いただけのフォーマットファイルを用意しても、新たに100バイトの領域が、レコードの後ろに確保することが出来ます。これは、元のレコードにない情報を読み取って書き出そうとした場合(データの書き出し時に限って)、フォーマットファイルに記述されたデータ長分のアスタリスク(\*)をデータの代わりに出力させる機能を利用したものです。(項目名の、旧領域、新領域は例です。他の名前でもかまいません。)

さらに、

```
新全領域,1,3500
```

とだけ書いたフォーマットファイルを用いると、全長3500バイトのレコードが用意されて、元々のデータにない部分にはすべてアスタリスク(\*)が入ります。このように書いたフォーマットファイルを用いても、元のデータは、そのまま引き継がれます。(項目名の新全領域は例です。他の名前でもかまいません。)

先頭に戻る、作業例の始めに戻る、レコードの後ろに新たに予備領域をもうけるの始めに戻る

#### V. MICを薬剤毎にまとめる。 先頭に戻る

MICを薬剤毎に別のカラムにまとめ、2薬剤、3薬剤のMICの関連を見る表を作る例です。(最初ここをクリックして、できあがった表を見てください。)

フォーマットファイルの例を示します。

file:///C:/Data\_IV/耐性菌サーベイランス/解析法の検討(研究班含む)/平成13年度報告書/資料1データコンバーター説明書/manual%2... 02/03/27